

保育者養成校の学生の性格特性 および進路状況との関連について

高橋 千香子・高岡 昌子・林 悠子・岩本 健一

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Personality Traits of Students at Nursery Teacher Training Schools, and Their Relations with Career Choice

Chikako Takahashi・Masako Takaoka・Yuko Hayashi・Kenichi Iwamoto

Naragakuen University Narabunka Women's College

本研究では、かつて保育者養成短期大学に在籍していた学生160名のY G性格検査の判定結果をもとに、その性格特性の傾向について明らかにするとともに、卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べることを目的とした。学生の半数近くにみられた性格特性は「情緒の不安定さ」であったが、それは情緒の豊かさや感受性の鋭さ、向上心や謙虚さにつながる側面であり、保育者としての資質と関連の深い特性であると考えられた。養成校ではこのような学生の資質傾向を理解した上で、それらを保育者の資質に高められるよう指導していくことが必要である。進路状況との関連では、保育職への就職率において5つの性格類型のあいだに差はみられなかったことから、学生が保育職を選択することと性格特性とのあいだに関連はみられないことが示唆された。一方、職種に関わらず非正規として就職あるいは就職をしない選択をした学生と、性格尺度における「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生とのあいだに関連があることが示唆された。

キーワード：学生の性格特性、YG性格検査、進路状況、保育者の資質

1. はじめに

保育者養成校には、将来保育者になることをめざして多くの学生が入学してくる。近年保育現場を取り巻く状況の変化はめざましく、保育職の需要は増え、本学にも多数の求人が来ている。学生にとっては好都合な状況であるが、保育現場で求められる能力やスキルも同時に高まっており、いかに質の高い保育者を養成するかが養成校の課題となって久しい。保育者に望まれる資質や実践能力については多くの研究がされているが、保育現場が新入職者に求めているものは、知識や技術よりも、人間性や責任感、礼儀やマナーといった、社会人としての基本的な資質の面であるとする調査結果もある¹⁾。では、資質と関連の深い「性格」という観点で捉えた場合、保育者養成校に在籍する学生はどのような性格特性の

高橋千香子・高岡昌子・林 悠子・岩本健一 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

傾向がみられるだろうか。

また、多くの保育関係の求人があるにも関わらず、保育職に就くかどうか悩み続ける学生や、保育以外の仕事あるいは進学の道を選ぶ学生、また、職種にかかわらず講師やアルバイト等の非正規として就職していく学生がいる。入学後、保育者になるための学習や経験を重ねる中で、自らの保育者としての資質や適性について改めて見つめ直すことになると思われるが、学生の進路選択と性格特性とのあいだに何らかの関連はみられるであろうか。

本研究では、保育者養成校における学生の性格特性について検討するとともに、卒業時の進路状況（進路選択）との関連を調べることを通して、保育者をめざす学生の全体的傾向への理解を深め、保育者養成のあり方を考える手がかりのひとつとしたい。また、在学中の学生指導や進路指導にもつなげたいと考える。

2. 方法

2.1 調査方法

本学幼児教育学科の卒業年次（2回生および長期履修学生制度における3回生）に開講されている「教育心理学」における「性格」についての講義の中で、性格検査の実際を知ること、そして自分の性格傾向について知ることを目的として、受講学生全員にY G性格検査を実施している。授業の中で検査の特徴および実施方法を説明した後、担当教員が項目を読み上げ、一斉に実施する。実施後、採点・判定方法を説明し、各自で行わせる。そして判定結果から自己の性格傾向、保育者としての強みと弱みについて考察したレポートを提出させている。なお欠席者には後日個別に説明し、自宅にて実施させている。

今回は、平成25年度から平成27年度の3年間に実施したもののうち、記入に不備のない160名の判定部分について分析を行った。実施時期および160名の内訳は、平成25年7月に46名、平成26年7月に35名、平成27年7月に40名、および12月に38名（長期履修学生）に実施している。対象者の年齢は19歳から21歳が中心である。

2.2 分析方法

Y G性格検査では、類型別による判定と因子尺度による判定が可能である。類型別では、A型（平均型）、B型（不安定積極型）、C型（安定消極型）、D型（安定積極型）、E型（不安定消極型）の5つの類型に大きく分類される。さらに典型、準型、Aとの混合型（AB型、AC型など）の15型に細別されるが、今回は、準型、混合型の人数は相対的に少なかったこともあり、中心となる5類型に含めてカウントした。因子尺度とは、Y G性格検査を構成する12の性格尺度、すなわち「抑うつ性」「回帰性」「劣等感」「神経質」「主観性」「非協調性」「攻撃性」「一般的活動性」「のんきさ」「思考的外向」「支配性」「社会的外向」の、それぞれの得点の高低により性格特性を判断するものである。この12尺度は6つの性格因子にまとめられ、因子別に分析することもできるが、今回は12尺度別でのみ分析した。

まず、160名の学生の性格類型別の人数および割合についてまとめ、傾向を考察した（3.1）。

次に、160名の進路状況の内訳を類型別に整理し、進路状況とのあいだに関連性がみられるかどうかを調べた。また、職種に関わらず講師やアルバイト等、いわゆる非正規として就職した者に着目し、性格類型別に特徴が見られるかどうかについて調べた（3.2）。最後に、12の性格尺度別に、進路状況との関連を調べた。まず、尺度ごとの各学生の得点（0～20点）を合計して平均値を算出し、平均値をラインとして、全学生を尺度別に低得点群と高得点群に二分した。そして、①保育職に就いた人数と、それ以外の人数②正規で就職した人数（進学を含む）と、それ以外の人数（非正規または就職しなかった人数）を出し、それぞれ性格特性の低得点群と高得点群のあいだに人数の違いがみられるといえるかどうかを調べるため、尺度別に χ^2 検定を行った（3.3）。

なお、進路状況については、毎年年度末に学生課でまとめられる進路状況一覧表を参考にした。

3. 結果および考察

3.1 類型判定結果からみた学生の性格特性

性格類型別でもっとも多かったのはB型（48名、30%）で、次いでE型（39名、24%）、D型（31名、19%）、A型（28名、18%）の順となり、C型（14名、9%）がもっとも少なかった（図1）。

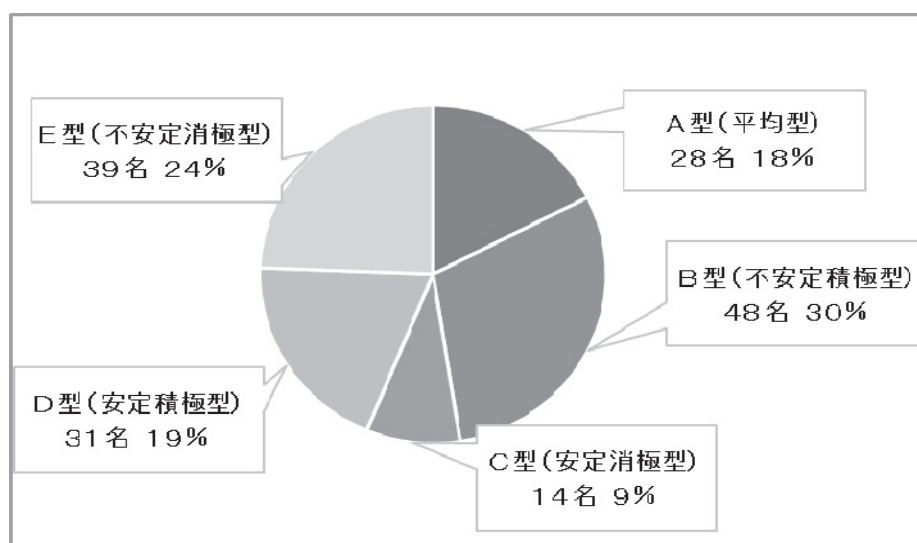


図1 YG性格検査の性格類型別の内訳（N=160）

B型がもっとも多いという結果は、須藤による先行研究とも一致している²⁾。B型の性格特徴は、気分の変化が表に出やすく、活動的で外向的とされているが、保育者をめざす学生のひとつの傾向を表しているのではないかと考えられる。次に多いE型は、気分が不安定になりやすく、消極的で内向的な性格とされている。あまり保育者には向かない性格のようであるが、この中には、真面目で大人しく、成績が上位の学生も含まれており、この点も先行研究と一致している²⁾。

B型とE型を合わせると54%となり、半数以上を占めている。行動や態度等への表れ方は正反対とい

えるが、共通する中心の因子は「情緒の不安定さ」である。「情緒の不安定さ」を尺度に置き換えると、「抑うつ性」、「回帰性」（著しい気分の変化、驚きやすい性質）、「劣等感」、「神経質」の4つの特性が相対的に高いということになる。あまり望ましくない印象をもつが、八木(1989)によると、これらを長所の視点で捉えなおした場合、適度な問題意識、情緒的、向上心、謙虚さ、良く気がつく、感受性の鋭さ、敏感さを表すとされている³⁾。情緒の豊かさや感受性の鋭さは、子どもを情緒的に受け止め育む保育者として重要な能力であり、謙虚さや向上心、良く気がつく姿勢なども現場が求める資質につながる側面である。これらの素質をもつが故に、自らの保育者としての適性を感じ、養成校に入学してくる学生が多いということが推測される。以上から、養成校では、このような学生の傾向を可能性を秘めた素質として捉え、保育者としての資質に高められるような指導の展開していくことが求められるであろう。

なおC型がもっとも少ない理由は、情緒的には安定的であるが、消極的で内向的という性格特徴であることから、保育者をめざす者が少ないのではないかと推測される。

3.2 性格類型別と進路状況との関連

今回分析対象とした160名の進路状況を、性格類型別にまとめたものが表1である。

保育所、幼稚園、こども園、児童養護施設等、何らかの保育職に就いた者は115名（72%）で、約7割の学生が正規・非正規問わず保育者としての仕事を選択している。その他の進路としては、一般企業21名（13%）、進学15名（9%）であり、家事都合等により就職しなかった者が9名（6%）となっている。保育職と一般企業については、正規採用および非正規採用（講師、アルバイト等）の人数についても記した。保育職に就いた115名の性格類別の内訳は、A型22名（19%）、B型36名（31%）、C型11名（10%）、D型20名（17%）、E型26名（23%）となり、全体の内訳（図1）とほぼ同じ割合であった。

表1 学生の進路状況（性格類型別）

職種 類型	保育職						保育職以外				就職せず (家事都合等)	正規 合計	非正規 合計	類型別合計 (%)	
	保育所 (正職)	幼稚園 (正職)	こども園 (正職)	施設	講師等(非 正規・アル バイト等)	保育職 合計	企業 (正職)	企業(非 正規・アル バイト)	進学	保育職 以外 合計					
A型	13	3	1	4	1	22	3	0	2	5	1	26	1	28	18%
B型	22	4	0	5	5	36	2	2	5	9	3	38	7	48	30%
C型	7	1	0	0	3	11	2	0	0	2	1	10	3	14	9%
D型	13	2	1	2	2	20	5	1	3	9	2	26	3	31	19%
E型	15	2	1	1	7	26	4	2	5	11	2	28	9	39	24%
合計	70	12	3	12	18	115	16	5	15	36	9	128	23	160	100%

3.2.1 保育職に就いた学生の割合と性格特性との関連

次に、進路状況（表1）を「保育職」、「保育職以外」、「就職せず（家事都合等による）」に分け、性格類型別の人数をグラフに表したものが図2である。

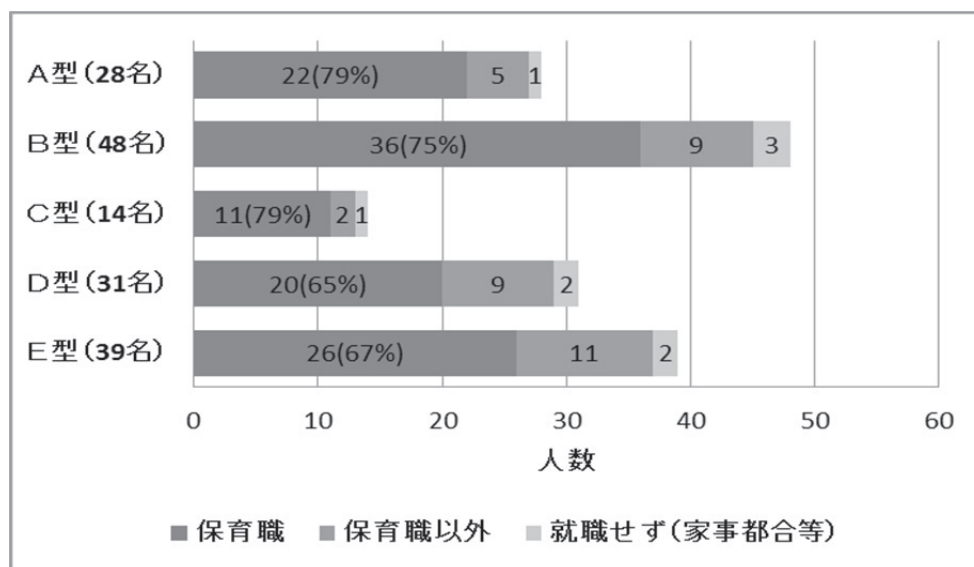


図2 性格類型別にみた保育職への就職率

性格類型別に保育職への就職率をみると、A型は28名中22名（79%）、B型は48名中36名（75%）、C型は14名中11名（79%）、D型は31名中20名（65%）、E型は39名中26名（67%）であり、保育職に就いた者の割合はA型とC型で比較的高く、D型とE型で比較的低い傾向がみられたが、性格類型別に有意な違いは見出されなかった（ $\chi^2=2.517$ $p=0.472>0.05$ ）。

この結果から、保育職に就く選択をすることと性格特性とのあいだには、特に関連はみられないといえる。消極的で内向的とされるC型やE型の学生においても、一定の割合の学生が保育職を選択している。このことから、学生が進路を決める時、その性格傾向によって保育者になるかどうかの判断が大きく異なることはないということが考えられる。ただ、D型において保育職を選択する学生の割合が比較的低いことは意外な結果であった。D型は、情緒的には安定的かつ外向的、積極的な性格であり、社会適応性が高い性格とされている。まさに保育職に就いてほしい人材といえるが、彼女らはなぜ保育職を選択しないのだろうか。D型の進路状況をみると、一般企業に就職した者の割合が、5類型のなかでもっとも高かった（6名、19%）。あくまで推測の範囲ではあるが、D型は適応性が高いが故に、保育職以外の職業にも適性を見出しやすく、そこにチャレンジしていける性格といえるのではないかと考えられる。なお本学はバスケットボール部とソフトボール部の活動が盛んであり、これらの競技を続けるために、進学や一般企業に就職する学生が比較的多い。これらの学生にD型が多いのではないかと予測し、調べたところ、対象者160名の中で両部に所属していた学生は23名で、性格類型別の内訳はA型6名、B型8名、C型1名、D型3名、E型5名であり、特にD型が多いとはいえない結果であった。

3.2.2 非正規として就職した学生と性格特性との関連

職種に関わらず非正規として就職した者は、160名中23名である（表1）。この23名を性格類型別にみると、A型1名、B型7名、C型3名、D型3名、E型9名であり、E型の占める割合がもっとも高い結果となった。23名のうち、筆者らの知り得ている範囲では、翌年度の公立園受験をめざし、講師とし

て就職することを選択した学生が4名、本人の希望や家庭の事情等で非正規による就職を選択した学生が4名含まれる。このような理由で非正規として就職していく学生も年々増えているが、正規による就職が選択肢にありながら、進路を決められないまま、受け身的に非正規での就職に至った学生も少なからずいる。

今回、非正規で就職した学生にE型が多かったという結果は特徴的であると考えている。人数が少ないことから統計的に明確なことは言えないが、E型の学生は内面に不安感や不安定感を抱えやすく、消極的で内向的であり、自分に自信がもてない学生たちである。この中には真面目で大人しく、成績上位の学生も含まれている。近年、能力的には高くても、性格的な弱さを感じる学生の中に、就職後に現場に適応できず、早期に離職してしまう学生が増えている印象がある。それらの学生がすべてE型であるとは限らないが、能力に関係なくE型タイプの学生は、日頃から大人しく、他の活発な学生の陰に隠れて目立たないことが多く、教職員と積極的な関わりをもたないまま卒業していく者も多い。就職支援の観点から考えると、E型的な傾向をもつ学生については、在学中の早い時期から目を配り、できるだけコミュニケーションをとりながら、学生本人が納得のいく進路選択ができるようサポートしていくことが必要であると考えている。

3.3 尺度別にみた性格特性と進路状況との関連

最後に、12の性格尺度別に進路状況との関連について調べた。2.2に記した分析方法に基づき、尺度ごとの低得点群と高得点群とのあいだに、①保育職に就いた人数とそれ以外的人数とのあいだに差がみられるか、②正規で就職した人数（進学を含む）とそれ以外的人数（非正規として就職または就職しなかった人数）とのあいだに差がみられるかについて調べた結果が表2である。

①の保育職への就職率については、12尺度のすべてにおいて、高得点群と低得点群のあいだに有意な差はみられなかった。つまり、保育職を選択した学生とそれ以外の学生とのあいだに、何らかの性格傾向の差による違いは見出されなかった。これは3.2.1の結果とも一致していると考えている。

一方、②の正規による就職とそれ以外については、「劣等感」と「非協調性」の尺度で、それぞれ5%水準で有意な差がみられた。すなわち、これらの2つの性格特性が高い傾向にある学生は、正規での進路を決めていない割合が高いということが示唆された。

YG性格検査における「劣等感」は、「失敗しやしないかいつも心配である」「困難にぶつかると気がくじける」「何かにつけて自信がない」などの項目から構成されており、自信の欠乏、自己の過小評価、不適応感の強さを表すとされている。「非協調性」は、「親友でも本当は信用できない」「人は結局利欲のために働くのだと思う」などの項目から構成されており、不満が多く、人を信用しない性質を表すとされている。すなわち、これら2つの性格尺度は、自己や他者への信頼感の弱さを表していると考えられる。

先述のとおり、これらの学生の中には積極的な理由で非正規による就職を決めていたり、就職しない選択をしている学生も含まれているが、自己を肯定できず、他者に対して不満や不信感を抱きやすい学生は、自らの適性についても肯定的に捉えることができず、将来の安定したイメージも抱きにくいのではないだろうか。そのため進路について誰かに相談することもできにくく、受け身的に進路を決めざる

を得なくなることが推察される。これらの学生については、在学中に自らの考え方の傾向に気づき、自信をもつことや他者への信頼感を回復させることが鍵となるが、短い在学期間に容易に解決できる問題ではない。これらの学生に対する学習や就職支援のあり方としては、先に述べたように、まずは他者とのコミュニケーションに開かれるきっかけをいかにつくるかであろうと考える。

なお、保育者としての資質と関連のありそうな「一般的活動性」や「社会的外向性」といった性格特性と進路状況とのあいだに関連は見出されなかったことから、これらの性格特性は進路の選択には影響を与えていないと考えられた。

表2 性格因子別にみた進路状況との関連（検定結果を含む）

尺度		N=160	①			②		
			保育職 (N=115)	保育職以外 (N=45)	χ^2 値	正規・進学 (N=128)	非正規・ 就職せず (N=32)	χ^2 値
抑うつ性 (平均値= 11.82)	低得点群 (N=80)	56	24	0.278	66	14	0.625	
	高得点群 (N=80)	59	21		62	18		
回帰性 (平均値= 11.29)	低得点群 (N=76)	58	18	1.412	65	11	2.763	
	高得点群 (N=84)	57	27		71	21		
劣等感 (平均値= 10.6)	低得点群 (N=92)	66	26	0.002	79	13	4.661*	
	高得点群 (N=68)	49	19		49	19		
神経質 (平均値= 10.74)	低得点群 (N=89)	66	23	0.517	71	18	0.006	
	高得点群 (N=71)	49	22		57	14		
主観性 (平均値= 10.69)	低得点群 (N=86)	62	24	0.004	71	15	0.761	
	高得点群 (N=74)	53	21		57	17		
非協調性 (平均値=9.57)	低得点群 (N=100)	72	28	0.002	85	15	4.167*	
	高得点群 (N=60)	43	17		43	17		
攻撃性 (平均値= 9.21)	低得点群 (N=83)	63	20	1.385	65	18	0.307	
	高得点群 (N=77)	52	25		63	14		
一般的活動性 (平均値= 10.15)	低得点群 (N=88)	61	27	0.632	69	19	0.309	
	高得点群 (N=72)	54	18		59	13		
のんきさ (平均値= 12.35)	低得点群 (N=80)	55	25	0.773	65	15	0.156	
	高得点群 (N=80)	60	20		63	17		
思考的外向性 (平均値= 10.03)	低得点群 (N=95)	70	25	0.378	74	21	0.648	
	高得点群 (N=65)	45	20		54	11		
支配性 (平均値= 9.21)	低得点群 (N=80)	57	23	0.031	62	18	0.625	
	高得点群 (N=80)	58	22		66	14		
社会的外向性 (平均値= 11.06)	低得点群 (N=80)	55	25	0.773	60	20	2.500	
	高得点群 (N=80)	60	20		68	12		
*p. <0.05								

4. まとめ

保育者養成校に在籍する学生の性格特性について明らかにし、それらの性格特性と進路状況との関連について調べた。保育者をめざす学生の半数近くにみられた性格的傾向は、情緒の不安定さであった。それは、見方を変えれば情緒の豊かさや感受性の鋭さ、向上心や謙虚さにつながる側面であり、保育者

の資質とも関連の深い特性であると考えられた。そのため養成校では、このような学生の資質傾向をふまえ、保育者としての資質に高められるよう指導していくことが求められる。

また、学生が保育職を選択することと性格特性とのあいだに関連は見出されず、学生は性格傾向に関わらず、保育職を選択していることがうかがえた。しかし、中には「自分は保育者に向いていないのではないか」といった不安を抱えながら、養成校に来たからという理由で保育職に就く選択をする学生もいるであろう。自らの性格傾向や保育者としての資質や適性について、より意識されたり影響を受けるのは、保育者として就職し、保育の仕事を始めた後ではないかと考えられる。

次に、E型タイプの学生や「劣等感」「非協調性」の傾向が高い学生は、職種にかかわらず非正規あるいは就職しない選択をする割合が高いことが示唆された。これらの学生をできるだけ早期に把握し、学生の自己肯定感を高められる関わりや、他者への否定的な認知を修正できるような経験を重ねることが、学生の内的な成長につながり、適切な進路選択につながると考えられるが、難しい課題でもある。

本研究では、学生の全体的な性格傾向と進路状況との関連から示唆される点についていくつかの考察を加えたが、いうまでもなく学生は一人ひとり異なる性質や能力をもち、背景事情も違うため、それらを総合的に見立て、各々に添った指導や支援をしていくことが欠かせない。

少子化の進行の中で、保護者を支え、将来を担う子どもの心身の基盤を育む保育者の役割は、今後ますます注目されるであろう。保育をめぐる今日的課題はさまざまな次元のものがあるが、保育者の早期離職の問題は、大きな課題のひとつである。本研究の今後の課題としては、学生の性格特性と就職後の動向との関連についても調べることで、在学中どのような性格特性に着目すべきか、高めておくべき資質や能力とは何か等について何らかの示唆を得ることができればと考えている。

引用文献

- 1) 林悠子、森本美佐(2014) 保育者に求められる学生の保育実践能力と資質について. 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要45: 123-130.
- 2) 須藤らん子(2003) 保育者の資質に関する一考察(その1) - 保育者養成校から見た学生の資質 -. 武蔵野短期大学研究紀要17: 21-28.
- 3) 八木俊夫(1989) 新版Y Gテストの実務手引-人事管理における性格検査の活用-. 67pp. 日本心理技術研究所.

参考文献

- ・浅見均(2000) 保育者の資質に関する一考察. 青山学院短期大学紀要54: 121-150.
- ・藤村和久(2012) 保育者特性インベントリィ (NTI) の標準化. 大阪樟蔭女子大学研究紀要2: 23-33.
- ・藤村和久、石曉玲(2013) 保育者特性検査の妥当化Ⅱ - 育児不安、自己観およびY G性格検査との関連性 -. 大阪樟蔭女子大学研究紀要3: 63-71.